授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2524 号

Progression of Tricuspid Regurgitation Early After Isolated Mitral Valve Repair

僧帽弁形成術後短期での三尖弁逆流の進行に関する研究

Esra Kaya（かや　えすら）

博士（医学）

論文内容の要旨

高度の僧帽弁閉鎖不全症を有する患者において、三尖弁閉鎖不全症の合併はまれではない。僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁形成術を施行する際に、三尖弁逆流が重症であれば、三尖弁形成術も併せて行うことがガイドラインで推奨されている。しかしながら中等度以下の三尖弁閉鎖不全症に対して三尖弁形成術を行うかどうかについては議論がわかれている。僧帽弁手術後遠隔期の三尖弁閉鎖不全症発生の予測因子についてはこれまでにいくつか報告があるが、術後短期での三尖弁逆流進行についての報告は少ない。そこで我々は、2014 年から 2019 年までに僧帽弁形成術のみを行った器質性僧帽弁閉鎖不全症患者において、術前と術後短期での三尖弁逆流の重症度変化を後ろ向きに調査し、三尖弁逆流進行の予測因子について検討した。手術前後の心エコー検査記録がないもの（N＝15）、術前に重度の三尖弁逆流を認めるもの（N＝1）、僧帽弁逆流の成因が機能性のもの（N＝6）は除外した。全 214 例の研究対象患者の平均年齢は 59 歳で 32.7％は女性であった。術前に 77.6％の症例は三尖弁逆流を認めず、20.6％は軽度逆流、1.9％が中等度逆流を認めていた。僧帽弁形成術後退院直前の心エコー検査では、15.4％の患者において、三尖弁逆流が術前より増加していた。術後三尖弁逆流が増加した患者群は、増加していない患者群と比較して有意に高齢で BMI（body mass index）が低値であった。多変量解析でも、年齢と BMI は独立した三尖弁逆流進行の予測因子であった。今後、僧帽弁形成術直後の三尖弁逆流の進行が長期予後に与える影響について検討する必要がある。